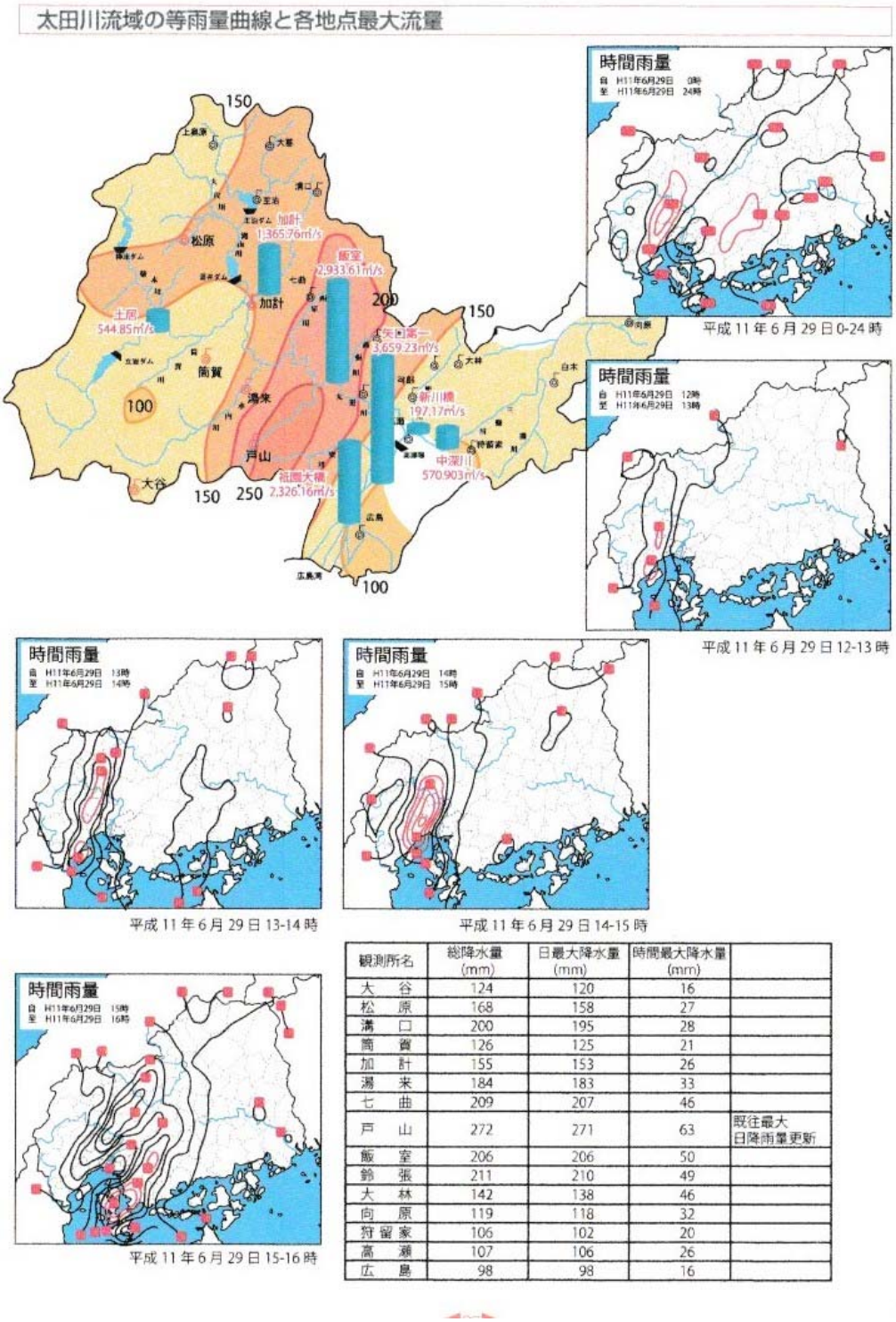
平成 11 年洪水・土砂災害

平成11(1999)年6月28日～7月3日

◎平成１１年洪水・土砂災害
平成１１（１９９９）年６月２８日～７月３日



観測所名	総降水量 (mm)	日最大降水量 (mm)	時間最大降水量 (mm)	
大　谷	124	120	16	
松　原	168	158	27	
溝　口	200	195	28	
簡　賀	126	125	21	
加　計	155	153	26	
湯　来	184	183	33	
七　曲	209	207	46	
戸　山	272	271	63	既往最大日降雨量更新
飯　室	206	206	50	
鈴　張	211	210	49	
大　林	142	138	46	
向　原	119	118	32	
狩留家	106	102	20	
高　瀬	107	106	26	
広　島	98	98	16	

「太田川・小瀬川流域の気象」（国土交通省太田川河川事務所）から

■気象の概況

西日本に停滞していた梅雨前線上に低気圧が発生し、発達しながら中国地方を通過しました。この低気圧に向かって南から暖かく湿った空気が流れ込んだため、大気の状態が非常に不安定となり、広島県に大雨をもた

らしました。

６月２９日午前０時頃から降り始めた雨は、午前中は県北部を中心に局地的に強まり、時間雨量２０ミリ以上を記録しました。午後には前線の活動が更に活発になり、１時～４時にかけて広島市佐伯区から安佐北区にかけて時間雨量５０ミリを超える強い降雨を観測しました。２９日夜には梅雨前線は南下し、降雨は次第に弱まりました。

２８～２９日の連続雨量は広島市安佐南区戸山で２７１ミリ、安佐北区飯室で２０６ミリを観測し、特に強い降雨を観測した２９日午後１時～４時頃にかけては時間最大雨量が戸山（吉山川）で６３ミリ、飯室で５０ミリ、鈴張（鈴張川）で４９ミリを観測。太田川中流域で記録的な時間雨量となりました。また戸山での２９日の１日降雨量２７１ミリは過去最大の２３３ミリを大きく超えました。短時間集中型の記録的な降雨となりました。

太田川中流域ではまとまった降雨により、太田川水系の河川水位が急上昇し、２９日午後１時５０分に飯室水位観測所▽４時２０分に矢口第一水位観測所▽４時半に新川橋水位観測所▽５時に祇園大橋水位観測所▽６時２０分に中深川水位観測所がそれぞれ氾濫注意水位（当時の名称は警戒水位）を超えました（国交省太田川河川事務所「太田川・小瀬川流域の気象」から引用）

■被害の状況

広島県内の被災箇所は土石流などで１３９箇所、がけ崩れで１８６箇所に及びました。また、死者３１人、行方不明者１人、家屋全壊１５４１戸といった数字を見ると、昭和63（１９８８）年広島県北西部豪雨災害を大きく上回る、大規模な土砂災害となりました。特に被害は都市近郊の新興住宅地に集中し、都市型の土砂災害とも位置付けられました。

中国新聞は６月３０日付朝刊で**「３００ミリ豪雨　安芸路に猛威」**と報じています。１日付朝刊では**「被害拡大死者２６人に／中国地方　不明９人　懸命の救出」**と続報。呉市吉浦東町、広島市安佐北区深川６丁目、佐伯区五日市町下河内で相次いで遺体が確認されています。また、７月３日付朝刊は**「２３３８世帯に避難勧告／広島県内再び強い雨」**と報じ、広島市佐伯区では孤立した三人がヘリで救出されています。

交通機関も山陽新幹線、在来線、広島電鉄、路線バス、高速バスなど全てで運休や遅れが相次ぎました。また、太田川上流域の土砂崩れによって大量の流木が広島湾に流出し、広島市西区の草津漁港の港内を埋め尽くしてを麻痺させています。漁船の入港が半減して中央卸売市場の鮮魚の卸値が高騰しました。広島市と呉市には被災者生活再建支援法が適用されました。１９９５年の阪神大震災を受けて創設された制度で、適用は本件が初めてです。

広島市佐伯区八幡が丘の崩壊斜面と被災建物
（土砂災害ポータルひろしま／広島県から）

中国新聞は同年７月半ばから**「６・２９豪雨災害　団地が危ない」**と題して３回の連載記事を掲載しました。広島市安佐南区の瀬戸内ハイツや佐伯区八幡が丘二丁目の明星園など犠牲者を出した地域を取り上げ、団地が山に向かって造成されている危うさ、堰堤建設など上流の開発区域以外の防災対策が「お願い」ベースであることなどを指摘しています。また、山の樹木の力（土壌緊縛力）が保たれているかどうか、力があっても土砂の勢いが勝ったか、この論点も取り上げました。さらに豪雨災害に見舞われた広島市佐伯区の東観音台団地と安佐北区の譲羽団地の住民にアンケートを取ったところ、「家を買う時、砂防ダムの有無など防災対策を意識した」と答えた人はわずか１割で、被災前に避難所がどこにあるのか知らなかった人も３分の１に上りました。

この「６・２９豪雨災害」がその後も教訓とされ、中国新聞は２００９年に**「土砂災害の教訓―６・２９豪雨から１０年」**（３回）を連載しました。記憶の風化が進む一方で、広島県内で土石流の危険個所にある住宅のうち砂防ダムで被害を防ぐ対策を行ったのは４１・６％（２００８年度末）にとどまる実態も判明しました。「土砂災害がいつ、どこで起きるかは十分に解明できていない」（土田孝・広島大大学院教授）という指摘は、悲しいことに２０１４年の広島土砂災害が証明しました。連載では自主防災組織の活動の重要性と課題も報告しています。広島県は２００９年、６月２９日を「ひろしま防災の日」に定めました。

呉市吉浦東町のがけ崩れによる被災
（土砂災害ポータルひろしま／広島県から）

６・２９豪雨から１０年を経た
２００９年の中国新聞連載

トピック

広島市佐伯区五日市上河内の河内公民館の敷地内には「忘れまい土砂災害の碑」が建立されています。１９９９年６月２９日の豪雨災害により、この地区では１０人が犠牲になりました。石碑には１７５５年からこの地で起きた洪水や土石流の記録が刻まれています。毎年６月に追悼式典が営まれています。表の碑文は以下の通りです。

河内は大災害に幾度も見舞われたが住民の強い結束と助け合いの精神で困難を乗り越え先人の英知と努力で今日があることを忘れてはならない　過去の災害の大惨事を教訓に災害記録の碑を建立し後世に伝えるものである　平成二十四年六月吉日建立

災害の記録

一七五五年宝暦五年　窓山山津波　土石流八幡川をふさぎ中郷～下城の流路が一変

一七七一年　明和八年　下河内野地谷大洪水　死者一名

一八二四年　文政七年　下河内殿畑　田畑流失不作で不変の村高を例外的に免租

一八二九年　文政十二年五月二十四日　荒谷大地震　山抜け

一九二八年　昭和三年六月二十四日　中郷・下河内大洪水　死者一名　家屋流出二戸

一九四五年　昭和二十年九月二十日　野登呂大洪水　死者四名　行方不明一名　家屋倒壊三戸田畑流失埋地五町（五〇〇アール）

河内公民館の
「忘れまい大災害」の碑
（広島市佐伯区上河内）

一九五一年　昭和二十六年十月十四日　ルース台風襲来　八幡川氾濫死者三名　家屋流出三十戸　橋梁流失二十件　田畑流出十一町八反（一一八〇アール）
一九九九年　平成十一年六月二十九日　記録的豪雨　死者十名　負傷者十一名　住宅全壊三十九棟　半壊二十二棟　家屋浸水六十七棟　道路橋梁被害四十一件　田畑被害八五四アール　山・崖崩れ九十一箇所

碑文には江戸期以来の災害が刻まれている

また、近くの河内児童館の前には「防災功労者表彰の碑」が建立されています。河内地区自主防災会連合会が２０２１年度の土砂災害防止功労者国土交通大臣表彰の受賞団体に選ばれたことによるものです。防災講演会の開催や記憶をつなぐ記録映像の制作など継続的な活動が評価されました。河内村青年団が１９２８（昭和３）年に村有林の下草刈りをした折の報酬で寄贈したサイレンも残っており、その趣旨が公民館前のフェンスに掲げられています。災害が多発した地域ならではの自主的な活動といえます。

「防災功労者表彰の碑」